
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 7

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 121.ダイナミックスキル理論における「スキル」に関する誤解
- 122.発達測定と大森哲学:語りに潜む固有の意味世界
- 123.発達測定者には高度な意識レベルが求められるか?
- 124.米国で注目を集める新しい学力アセスメント:2020年度大学入試改革を見据えて
- 125.米国における新たな学力アセスメント「DiscoTests」とは?:2020年度大学入試改革を見据えて
- 126.深層能力涵養に有益なフィードバックと害悪なフィードバック
- 127.「DiscoTests」の中身:2020年度大学入試改革を見据えて
- 128.心理学界のアインシュタイン「カート・レヴィン」について
- 129.カート・レヴィンの功績「グループダイナミクス」の提唱
- 130.人間としての器の成長と実務能力の成長
- 131.カート・フィッシャーの「ダイナミック・スキル理論」の要約
- 132.「ダイナミック・スキル」の再定義
- 133.ダイナミック・スキル理論誕生史:パラダイムの波に晒されて
- 134.ダイナミック・スキル理論誕生史:デカルト的認識論を超えて
- 135.映画「バケモノの子」を鑑賞して:発達理論の観点より
- 136. 絶えず乱高下する成長・発達プロセス
- 137.性格類型テストや360度評価の限界と新たな測定手法
- 138.「統合心理学」としてのダイナミック・スキル理論
- 139.知性発達理論の影と闇、そこからの救済
- 140.「弁証法思考」の誤解:オットー・ラスキーが提唱する高度な思考形態

121. ダイナミックスキル理論における「スキル」に関する誤解

先日、インテグラル・エデュケーションさん主催の勉強会で、ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーの「ダイナミックスキル理論」について紹介させていただきました。

当日の勉強会で参加者の方々から寄せられた質問や、勉強会后、参加者の方々から頂いた疑問点などを伺っていると、どうもフィッシャーが言うところの「スキル」というものが何を表しているのか明確に伝えられていなかったと反省しています。

一番多い誤解は何であるかという、フィッシャーの「スキル」という概念を、世間で言われる「コミュニケーションスキル」や「プレゼンテーションスキル」といった印象で捉えているということです。もちろん、フィッシャーはスキルという概念を広く定義しているため、「コミュニケーションスキル」や「プレゼンテーションスキル」というものも、フィッシャーが指摘するスキルという概念に包摂されることは確かです。

しかし、フィッシャーが真に意図しているスキルというのは、そうした「コミュニケーションスキル」や「プレゼンテーションスキル」というものを発動させている深層的な認知能力のことを指しています。つまり、「コミュニケーションスキル」や「プレゼンテーションスキル」というものは、ある意味、PCのアプリケーションのようなものであり、フィッシャーが述べているスキルというのは、アプリケーションを動かすOSそのもののことです。

別の表現をすれば、発達理論を学習されている方にとっては馴染み深い、ロバート・キーガンで言うところの自己認識の深まりも、フィッシャーの理論で言えば、一つのスキルとして扱われます。なぜなら、キーガンは意識領域における自己認識という領域の深層構造について扱っており、キーガンが対象としているものは、決してPCのアプリケーション的なものではなく、まさに自己認識を生み出すOSそのものだからです。

要するに、フィッシャーが述べているスキルというものは、コミュニケーションスキルやプレゼンテーションスキルのような単なる行動能力ではなく、そうした行動能力を生み出す認知的な能力のことを意味していると理解していただければと思います。

122. 発達測定と大森哲学: 語りに潜む固有の意味世界

現在、欧米に起源を持つ、意識進化を扱う発達理論を日本の偉大な思想家・哲学者の枠組みを通して見直すということを行っています。

具体的には、「ことだま論」「立ち現れ一元論」で知られる大森荘蔵、イスラム思想や人間の意識の本質を探求した井筒俊彦、主観と客観の二分法的認識問題に対して、直接に与えられた純粹経験に解決の糸口を見出し、思惟や実在に関する思索を行った西田幾多郎、日本的靈性を探求し、「近代における日本最大の仏教者」と評される鈴木大拙などの思想的枠組みを通じて、欧米発の発達理論というものを再解釈し、再構築するという探求をしています。

数々の優れた日本人の思想家の書物を読みながら、特に大森荘蔵先生が述べる論理と世界との関係についての洞察は、発達測定を行う者にとって深い気づきにつながるでしょう。

私たちが生きる物理世界は、そもそもただ一つしかありません。しかし、私たちの意味世界は無数に存在し、実際に、何かの現象を語る際には無数の語り方が存在します。

つまり、私たち一人一人は固有の意味世界を構築しており、そこから様々な観点をを用いて世界を眺め、多様な方法で世界を語るのです。

ここで興味深いのは、大森が指摘するように、世界の語り方がどれだけ無数にあろうとも、それら全てを貫徹しているものが存在しています。それが論理と呼ばれるものです。すなわち、論理は私たちの語りの中に常に内在しているものなのです。

意識の構造的差異を明らかにする発達測定者が行っているのは、まさにそうした語りの中に潜む論理の構造的差異を見ていることに他なりません。

つまり、発達測定者は、言葉(言語)に埋め込まれた、あるいは言語を用いた語りに対して、不可避免的に付随する論理の構造を観察することによって、他者がどのように意味世界を構築し、世界を見ているのかを分析するのです。

123. 発達測定者には高度な意識レベルが求められるか？

発達理論の講演をする際や発達理論のレクチャーをする際に、参加者や学習者の方からよく寄せられる質問として、「自分よりも意識段階が高い人の発達測定をすることはできますか？」というものがあります。この質問は、発達測定に従事する者にとって大事な点を含んでいると思います。

自我の研究で優れた功績を残したジェーン・ロヴィンジャーは、この質問に対して、Noと述べています。実際にロヴィンジャーは、「発達測定を行う際に、自分よりも意識段階が高い回答を正確に分析することはできない」と明確に述べています。つまり、ロヴィンジャーは、発達段階が自分よりも高い人の測定を行うことはできないということを主張しています。

それに対して、私の回答は、Yes & Noです。すなわち、自分よりも高次の発達段階を分析することは可能でもあり、条件によっては困難(あるいは不可能)でもあるということです。

具体的には、ロヴィンジャーが開発した「文章完成テスト」にせよ、その他の発達測定手法にせよ、信頼できる発達測定手法には基準の明確な分析マニュアルが存在しています。発達測定のトレーニングを数年間しっかりと積み、分析マニュアルに沿って測定を行えば、自分よりも高次の発達段階について分析することは実務上可能であるため、Yesとしました。

しかし、ロヴィンジャーが述べるように「No」の側面があるのも否定できません。簡潔に述べると、言語で語られた発話内容の裏に隠された言語構造を読み解き、発達構造を解釈するために求められる最低限の認知レベルが存在するのも確かです。

ピアジェの段階モデルで言えば、測定者は優れた形式論理思考を持っているか、理想としては後形式論理思考を兼ね備えておく必要があると思います。このように最低限の認知レベルがなければ、言語で表現された内面世界に立ち現れる意識構造を掴み取ることはできないと言っても過言ではありません。

さらに、ロバート・キーガンが産み出した「主体・客体インタビュー」というインタビュー形式の発達測定手法であれば、なおさら測定者には高度な認知レベルが要求されます。インタビュー中は、回答

者の話を聞きながら、意識レベルに対する仮説を立て、仮説を検証するための質問を被験者に次々と投げかけていかなければなりません。

つまり、キーガンの主体・客体インタビューでは、刻一刻と進むリアルタイムなインタビューの場の中で、相手の意識構造を理解しながら、それを確認する質問を投げかけていくという芸当が求められます。

結論としては、発達理論を数年間徹底して学び、特定の発達測定手法のトレーニングをしっかりと積み、高度な認知レベルを獲得することができていれば、発達測定は実務上どなたでも行うことができると思います。

【追記:オットー・ラスキーが提唱する最低限のトレーニング期間】

私が師事していたオットー・ラスキーは、発達測定に従事するものは、少なくとも4年間という時間をかけて、発達理論を学び、発達測定の鍛錬を積む必要があると述べています。

発達理論と発達測定のトレーニングを開始した当初の私は、果たしてそれだけの期間が本当に必要なのか半信半疑でしたが、ラスキーが提唱する最低限のトレーニング期間を経てみると、確かに発達理論と発達測定に少なくとも4年間ほどの時間をかけて鍛錬を積む必要があると思います。

124. 米国で注目を集める新しい学力アセスメント:2020年度大学入試改革を見据えて

日本に一時帰国中の現在、成人以降の発達理論と発達測定(アセスメント)に関する講演会・勉強会・コンサルティングをさせて頂く場を様々な方から提供していただいております。私としては、実務の世界で発達理論と発達測定の必要性が認知され始めている状況を好意的に受け取っています。

主に企業組織の文脈に身を置いて多様な共同作業をさせていただいているのですが、こうした成人期以降の意識の発達に対する学術探求と実務活動と並行して、教育関係者の方々とも対話をさせて頂く機会が増えてきています。

周りにいらっしゃる教育関係の方々から聞いた話によると、近い将来大きな教育改革が日本で実行され、それはもしかしたら既存の教育のあり方を根本から覆す、戦後最大の教育改革になるかもしれないとのこと。具体的な改革案として上がっているのが「2020年度大学入試改革」と呼ばれるものです。

この改革案の詳細についてきちんと把握しきれていないと思うのですが、どうやらセンター試験が廃止され、大学の個別試験がより多面的になり、従来の知識偏重型から知識活用型教育へ移行させる意図を持った改革なのだろうと理解しています。

しかし、教育関係者の方々から「どうやって客観的な評価をするのか？」「知識の活用力をどのように測定するのか？」という疑問の声を多々聞いています。私も同様の疑問を持っており、知識偏重型教育から知識活用型教育への方向転換は真つ当だと思いますが、知識の活用力をどのように定義付け、それをどのように客観的に評価していくのかという点が明確になっていなければ、この教育改革も砂上の楼閣となり、どこかで歪みを生み出し、崩れ去ってしまうのではないかと危惧をしています。

実は日本の教育界で議論されている2020年度大学入試改革と同様の動きが、米国でも数年前から起こっていました。それは「既存の学力テストでは計れない知識活用力の見直しとその客観的な測定」という動きです。

米国ではSATという試験が日本のセンター試験と同様の役割を果たしています。SATを含め、既存の学力テストでは知識の絶対量を測定することしかできず、真の意味で知識の活用力を測定することはできないのではないかと疑問の声が米国でも生まれていました。

私がインターンをしていたマサチューセッツ州にあるLecticaという組織は、ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーの「ダイナミック・スキル理論」という認知的発達心理学の枠組みに基づいた新たな学力テストを開発し、米国の公立学校に普及させる活動をしています。

新たな学力アセスメントの名前は「DiscoTests」呼ばれ、これを一言で述べると、それは知識の絶対量ではなく知識の活用力を測定するアセスメントです。今後の記事で少しずつDiscoTestsの中身を

明らかにしていきたいと思いますが、まずはその輪郭を掴むために下記の動画を見ていただければと思います。

<https://discotest.lectica.org>

125. 米国における新たな学力アセスメント「DiscoTests」とは？ :2020年度大学入試改革を見据えて

前回の記事は、日本で実行予定の2020年度の大学入試改革について言及し、米国で注目を集めている知識活用力を測定する新たな学力アセスメント「DiscoTests」について簡単に紹介しました。今回の記事はDiscoTestsについてもう少し詳しく解説をしたいと思います。

おさらいとして、DiscoTestsはSATを始めとする知識偏重型のアセスメントに対抗する形で生み出された学力評価手法であり、認知的発達心理学の枠組みに基づいて開発された「知識活用力を測定する評価手法」です。

DiscoTestsという名前は聞きなれないと思うのでその由来を簡単に紹介すると、このアセスメントは教師と生徒の対話 (discourse) を促すことを目的とし、対話という英単語の”discourse”に由来があります。

さらに、多くの生徒にとって、あるいは私たち成人を含めて、「テスト」という言葉を聞いただけで拒絶反応が起きやすいのが現実だと思いますが、本来テストやアセスメントは受けることに意味があるのではなく、さらなる成長・発達に寄与することに意味があるのです。

そうした認識のもと、Lecticaは「テストを受けて、生徒が気づきや発見を得て、学習意欲を高められるような楽しいテストを開発する」という思いを込めて、楽しく踊れるダンスクラブの「ディスコ (disco)」という意味もこのアセスメントの名前に組み込んでいます。

既存の学力テストでは往々にして、テストを受けて点数が算出されておしまいという事態が見られていました。つまり、既存の学力テストには生徒個人の学習プロセスの視点が欠如していたり、テスト結果のフィードバックを行うという対話の余地が存在していませんでした。

結果として、生徒はテストを何のために受けているのかわからず、自分の学力向上の喜びや学ぶ楽しさを味わえないまま、無味乾燥なテストスコアでラベリング化されるという拷問を受け続けていたと言えるでしょう。

それに対して、DiscoTestsは生徒一人一人の固有の学習プロセスを明らかにし、生徒各人の学習ニーズに沿った学習提案やフィードバックレポートを提供してくれます。日本にも記述式試験というものが存在していますが、その採点は結局のところ、必要な知識項目が網羅されているかをチェックする形で行われる傾向にあると言えるでしょう。

しかし、DiscoTestsは全て記述式でありながらも、特定領域(特定科目)の知識活用力を測定できるメカニズムとシステムを持っている点がユニークです。このメカニズムとシステムも含めて、DiscoTestsのさらに詳しい中身は別の記事で改めて取り上げたいと思います。

126. 深層能力涵養に有益なフィードバックと害悪なフィードバック

認知的発達心理学の枠組みに基づいた発達測定をした後に、どういったフィードバックを行うかがその人の発達や学習を支援するためには重要であると言われています。確かにアセスメントを受けただけでは全く意味がないので、この指摘は正しいと言えば正しいのですが、現実にはそれほど簡単ではありません。

私がインターンとして働いていたマサチューセッツ州にあるLecticaの創設者セオ・ドーソンは、フィードバックの内容によっては学習や発達を妨げかねないと警鐘を鳴らしています。Lecticaのアセスメントは、カート・フィッシャーの「ダイナミック・スキル理論」を理論的枠組みとして採用していますが、フィードバック時にスキルレベルの特性をそのまま教えることを避けています。つまり、一つ一つのスキルレベルがどういった意味なのかを事細かにフィードバックすることはないということです。

スキルレベルの特性をフィードバック時に教えない理由としては複数考えられます。一つには、アセスメントを受けた学習者はスキルレベルの記述を「コンテンツ」として学ぼうとしてしまうことに繋がりがかねません。とかく現代の教育は、何らかの知識という「コンテンツ」の習得を学習者に促す傾向にあるため、この第一の理由が存在することはうなづけます。

しかし、スキルレベルをコンテンツとして学んだところで、真の意味で深層的なスキルレベルが涵養されることはありません。すなわち、スキルレベルを単に知識として取り入れることはスキルレベルの向上に役立たないのです。

しかしながら、仮に知識として取り入れるだけではなく、その知識に基づいた具体的な実践がきちんと伴っているのであれば、スキルレベルは成長していくと考えられます。ここで問題となっているのは、スキルレベルの記述を単に表面的な知識として取り入れることです。

スキルレベルの特性をフィードバック時に教えない二つ目の理由は、仮にスキルレベルの特性を伝えてしまうと、学習者は高いスキルレベルを獲得することが学習の究極的な目標であると錯覚しかねないということです。

往々にして、高度なスキルレベルを獲得することが学習の究極命題であると思いがちな人は、「発達は善である」という安直な上昇志向の物語に絡め取られていると思います。こうした発想の下では、学習や教育のあり方、発達とは何かという理解が歪められることになるので、単純に高度なスキルレベルを獲得しさえすればいいという考え方に陥らないようにする必要があります。

127. 「DiscoTests」の中身:2020年度大学入試改革を見据えて

これまでの記事で紹介してきたように、DiscoTestsは知識の絶対量を測定するものではなく知識の活用力を測定することに主眼が当てられています。さらに、生徒一人一人の学習・成長プロセスに応じた学習提案を実現することを目的にしています。

一見すると、DiscoTestsは生徒の学習を支援し、生徒がどこまで学習単元を理解しているかを随時測定していく形成的テスト(formative assessments)に過ぎないように見えるかもしれませんが、表面上は形成的テストのように見えるかもしれませんが、DiscoTestsはアセスメントに対する新たなアプローチを複数採用しています。それは何かというと、認知的発達心理学の理論モデルのみならず、学習科学、心理統計、教育哲学の叡智を統合している点です。

DiscoTestsは教育評価の新しいアセスメント手法であり、個人の学習ニーズや関心に焦点を当てながらカリキュラムを組み立てるために活用することを目的にしています。この目的を達成するために、Lecticaは新しい標準検査手法(standardized tests)の開発に着手したという経緯があります。

すべての学習者にとって有益なアセスメントを構築することを目指して、DiscoTestsで提供される全てのアセスメントには、アセスメントを受けることそのものが学習経験になるような配慮がなされています。また、アセスメント実施側の教師には、生徒の知識活用力に関する詳細な情報とアセスメント結果がどのように学習目標・カリキュラム目標と関係しているのかという情報がフィードバックされます。

さらに、DiscoTestsは実証的なデータに基づいたカリキュラムデザインを可能にするだけでなく、教育政策者に対しても、教育実践に関する有益な情報を提供してくれます。こうした応用可能性と共に、認知的発達心理学を探究している私にとって興味深いのは、全てのDiscoTestsには学習者が特定の学習項目(学習領域の概念など)をどのように習得していくのかという認知的発達心理学の研究成果が盛り込まれていることです。

ここまでのところを要約すると、DiscoTestsは自由記述形式のアセスメント手法であり、認知的発達心理学の実証成果に基づいて構築され、学習者のみならず教育者や教育政策者に対しても有益な情報をフィードバックすることを可能にするアセスメント手法なのです。

さらに、全てのDiscoTestsは心理統計的に精緻な測定メカニズムを持っており、カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論を応用することによって、幅広い学習項目を一つの尺度で統一して評価できる点も特徴的です。

統一の尺度で測定されたスコアは、生徒の現在の知識活用力を示すだけではなく、これまでと比較して生徒がどのように成長・発達してきたのかという軌跡を明らかにすることも可能であり、さらにその次に習得していくことが何なのかも明らかにしてくれるアセスメント手法です。

現在米国では、DiscoTestsをコンピューター上で受けることができ、さらに評価もコンピューター上で行われるため、大規模なアセスメントの実施が可能になっています。日本の教育界においては、まだ統一的な尺度に基づいたアセスメントが開発されていないのではないかと危惧を持つとも

に、そもそもアセスメントに対する教育関係者の理解度も十分ではなく、アセスメントを大規模に展開する土壌も整備されていないのではないかと考えています。

もし、2020年度の大学入試改革を真に意味のあるものとして実現化していくためには、教育関係者のアセスメントに対する認識を変えていく啓蒙活動に加え(文化醸成)、大規模なアセスメントを展開するためのシステム作り(制度設計)に早急に着手する必要があるのではないのでしょうか。身近にいらっしゃる教育関係者の方々に話を伺う中で、この改革案が「戦後最大の教育改革」になるのか「戦後最悪の教育改革」になるのか、今の状況はその瀬戸際にあると思うに至りました。

128. 心理学界のアインシュタイン「カート・レヴィン」について

発達科学の領域に応用数学の一分野ダイナミック・システム理論が積極的に活用されていることを背景に、継続的にダイナミック・システム理論に関する専門書や論文に目を通しています。

こうした文献調査を続けているうちに、心理学の領域にダイナミック・システムの発想を取り入れた人物は、カート・レヴィンが最初なのではないかと思うようになり、彼の功績を少しずつ見直すということをしています。レヴィンの論文や書籍を読めば読むほど、彼は心理学におけるアインシュタインのような人物ではないかと思っています。

簡単にカート・レヴィン(1890-1947)がどんな人物かを紹介すると、レヴィンはポーランド生まれ、その後アメリカ人に帰化し、社会心理学・組織心理学・応用心理学に貢献をした学者です。特に「社会心理学の創設者」と呼ばれていることから、集団心理や集団力学(グループダイナミクス)に対するレヴィンの洞察は深いものがあります。さらに、MITの教授時代に初めて「アクションリサーチ」という言葉を提唱し、当該分野を開拓したことで知られています。

レヴィンの学術的な経歴をもう少し説明すると、彼はフライバーグ大学で最初医学を学習しており、その後ミュンヘン大学に移って生物学を学習していました。さらに、行動心理学を学びつつ、徐々にゲシュタルト心理学へと傾倒していきました。ベルリン大学で哲学と心理学の教鞭を振るうとともに、研究者としてタヴィストック研究所に参画していました。

レヴィンは当時盛んに議論されていた「氏か育ちか」という論争に対して、遺伝的要因と環境的要因の双方が人間形成に影響を与えるということを、彼の有名な方程式 $B = f(P, E)$ を用いて提唱しています。

この方程式はレヴィンが提唱した理論の鍵を握るので今後詳しく解説をしたいと思いますが、この方程式の本質を簡単に述べると、ある人間の行動(Behavior)は、その人(Person)自身とその人を取り巻く環境(Environment)の関数であるということを意味しています。

この方程式は特に社会心理学の文脈でよく知られており、「Principles of Topological Psychology (1936)」という難解であると同時に洞察溢れる専門書に詳しい説明がなされています(5年前に読んだ時は、何が書かれているのかよく分からなかったのですが、大切なことを述べているに違いないと直感的に気付かされたのが懐かしいです)。

レヴィン以前の心理学においては、人間の行動を分析する際に専ら過去の行動に焦点が当たっていたのですが、レヴィンの方程式の功績を一言で述べると、人間行動を理解する際に、その瞬間にその人が置かれている状況の重要性に着目したことです。つまり、レヴィンはいち早く、人間の心と環境との相互作用に気づいていたということです。

この点は、カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論や応用数学のダイナミック・システム理論にもやはり影響を与えていると思います。瞬間瞬間に変動する文脈を考慮して包括的に人間行動を理解しようという試みをレヴィンは行っていたのだと思います。

【追記:「最先端」と言われる最先端ではないもの】

発達科学というものが欧米を中心として、英語という言語空間の中で展開されている分野であるため、残念ながら日本に入ってくる発達科学に関する情報量は雀の涙ほどしかありません。さらに、日本で最先端の理論として有り難く崇められるような理論も20年から30年の時差を持って欧米から私たちに届けられます。

感覚的なイメージとしては、砂浜に漂流してきた年代物の古びた空き缶を拾っているような印象でしょうか。漂流してくる空き缶は珍しいものではあるかもしれませんが、決して時代と足並みを揃えて生きているようなものではありません。

発達科学という分野において日進月歩で生み出される最先端情報は、それが最先端であるがゆえに時に荒々しく、検証の余地が多分に残っている可能性もあります。ただし、情報というのは「生もの」あるいは「生き物」であるという性質上、最先端情報は生命力や躍動感を放っているのは間違い無いでしょう。

それでは、発達科学に関する最先端情報を摂取するためにはどうしたらいいかというと、とりあえず日本語空間から脱却して、英語空間内で展開されている情報を英語という言語を媒介にして驚掴みにするのが得策だと思います。

本音を述べると、英語で出版されている書籍や論文にアクセスできたとしても、それらは最先端と呼べる代物ではありません。最先端の生命力ある情報たちは、往々にして科学者同士の対話や共同研究の中で飛び交っているようなものなのです。そう考えると、現在私は科学コミュニティから一歩遠ざかったところで実務作業に専念しているため、真の意味で発達科学の生命力や躍動感を感じられていないのかもしれませんが。

129. カート・レヴィンの功績「グループダイナミクス」の提唱

前回の記事で、カート・レヴィンの生い立ちや経歴を簡単に紹介しました。レヴィンは、個人や集団の心理に影響を与える心理場の分析やMIT在籍時代に初めて「アクション・リサーチ」という言葉を提唱したり、心理学や組織行動論に様々な貢献をしています。今回の記事は、レヴィンが果たした多様な貢献のうち、グループダイナミクスに焦点を絞って紹介したいと思います。

レヴィンは、1947年の論文「Frontiers in Group Dynamics」で初めて「グループダイナミクス」という言葉を提唱したと言われています。グループダイナミクスというのは、個人や集団が変わりゆく状況に応じてどのように反応し、振舞っていくかを示す概念です。

レヴィンが活動をしていた当時において、集団心理や集団行動というのは掴みどころのない現象とみなされ、多くの心理学者はそれらを蔑ろにする傾向がありました。より具体的には、当時の心理学者は集団行動を単に構成メンバーの行動の総和にすぎないとみなしていたのです。

それに対して、レヴィンは「 $B = f(P, E)$ 」方程式を提唱し、集団心理や集団行動は単に個人の心理や行動の総和ではないことを説明しました。こうした考え方の大元はレヴィンがゲシュタルト心理学を探究していたことと関係しています。

ゲシュタルト心理学における「全体は部分の総和ではない」という言明に基づき、レヴィンは集団心理や集団行動のメカニズムを解き明かしていきました。集団は一つの動的かつ統一的なシステムであり、そうしたシステムの挙動は構成メンバーの挙動を別々に分析しては理解不能だという考え方をレヴィンは強く保持していました。

レヴィンが $B = f(P, E)$ という方程式を提唱したことによって、当初懐疑的だった多くの心理学者は集団心理や集団行動のメカニズムを再考し始め、グループダイナミクスという土壌が徐々に育っていききました。

当時の集団心理や集団行動に対する考え方を転換させたレヴィンの功績は、ニュートン力学では説明が困難であった現象をアインシュタインが $E = mc^2$ という方程式を提唱することによって説明した功績と同じぐらいの影響度があると思います。実際に、レヴィンの功績のおかげで、組織行動の領域や臨床心理の領域でグループダイナミクスの研究が今もなお継続的に進められています。

レヴィンのグループダイナミクスの功績が如実に現れている分野は、社会心理学や集団コミュニケーションの領域です。より具体的には、組織におけるマネジメントスタイルや集団思考にその功績が現れています。

特にレヴィンは、個人の思考が集団と関係し合うことによってどのように強められたり弱められたりするのかに関心を持っていました。個人の心理が集団によってどのように左右されるのかに関する研究は、「集団思考」という現象を探究する上でも鍵を握るので、今後の記事を通してそのあたりを説明したいと思います。

【追記:タヴィストック研究所について】

レヴィンが関与していたタヴィストック研究所は今もなお存在している研究機関ですが、その実態はなかなか掴み難いものがあります。もともとタヴィストック研究所は、精神分析学を用いて人間行動を解明することを目的に、1947年にカナダの経営学者エリオット・ジャックスらによって英国に設立された研究機関です。

しかし、実態はCIAなどと提携し、英国・米国の覇権を確固たるものとするために、大衆プロパガンダや洗脳に関する理論的・技術的研究を行っている陰謀機関であるとも言われています。

実際に、ヒッピー文化を生み出したビートルズもタヴィストック研究所の後押しによって世に送り出されたともささやかれています。具体的には、タヴィストック研究所で開発された洗脳用のサブリミナル技術がビートルズの曲のリズム、ビート、歌詞に盛り込まれているというのを聞いたことがあります。

130. 人間としての器の成長と実務能力の成長

ハーバード大学教育大学院に在籍する発達心理学者ロバート・キーガンとカート・フィッシャーは、ともにジャン・ピアジェから影響を受けた構成主義的発達論者ですが、両者が研究対象とする領域は若干異なります。ケン・ウィルバーが“Integral Psychology (2000)”で提示した発達理論の比較表を眺めてみると、やはり両者は異なる知性領域を扱っているというのがわかります。

確かに人間の意識に存在する多様な知性領域はどれも相互依存的であるため、明確に領域を区別することは困難です。国や地域によって、虹の色が7色だと認識されているところもあれば、5色のところもあるでしょう。また、仮に7色であったとしても、各色の間にはグラデーションが存在します。虹の色を切り分けるのが困難であるのと同様に、発達領域の切り分けも難解な作業となります。

こうした事情を考慮しつつ、あえてキーガンとフィッシャーの対象領域を切り分けるならば、キーガンは自己認識力と他者認識力の成長に着目し、フィッシャーは私たちが社会生活を営む中で発揮する諸々の認知スキルの成長に着目していると言えます。企業社会を例として言い換えると、キーガンはリーダーとしての器の成長に焦点を当て、フィッシャーはリーダーが発揮する具体的な実務能

力(意思決定能力、問題認識能力、問題解決能力、共同能力など)の成長に焦点を当てています。

さらに両者が対象としている領域の微妙な差異を指摘すると、キーガンもフィッシャーも確かにピアジェから影響を受けているのですが、フィッシャーの方がピアジェからの影響を強く受け、キーガンはモラルの発達段階理論を提唱したローレンス・コールバーグに強く影響を受けています。

キーガンはコールバーグの思想を受け継ぎ、自己認識能力と他者認識能力の二つの軸を行き来する意識の進化・発達プロセスを明らかにしたのに対し、実際に「新ピアジェ派」と呼ばれるフィッシャーはピアジェの思想を受け継ぎ、純粋に認知能力の進化・発達プロセスを明らかにしていると言えます。

また、両者が用いる発達測定手法も各々独自性があります。キーガンはコールバーグが産み出したモラル測定インタビューの手法を元に「主体・客体インタビュー」という測定手法を開発しました。

一方、フィッシャーはダイナミックスキル理論を元にして、言語で表現されるものであればいかなるものでも測定可能な手法を開発しています。基礎となる理論モデルが異なれば、それに立脚する測定手法も異なるというのは納得できます。

結論として、両者の間には対象とする知性領域の違い、強く影響を与えた人物の違い、測定手法の違いなどがあります。キーガンは人間力を対象とし、フィッシャーは現実世界の様々な文脈で発揮される実務能力に焦点を当てているということだけ掴んでいただければ、要点を外していないと思います。

【追記:人間力と実務能力の相関関係】

キーガンの発達理論とフィッシャーの発達理論の双方をレクチャーする際に、両者が対象とする知性領域の相関関係について尋ねられることがあります。つまり、人間としての器と実務能力には相関関係があるのかどうかという問いです。

この問いに対する研究はそれほど進んでいないので、推測の範囲内ですが、フィッシャーが対象とするスキル領域の中でキーガンが述べるところの自己認識力・他者認識力と強い関係がある実務能力であれば、両者の間には相関関係がありそうです。

例えば、リーダーが他者と共同する能力は、自分が他者をどのように認識しているか、そして他者が自分をどのように認識しているかという認識能力が求められるため、両者の間には強い結びつきがある可能性があります。

逆に戦略思考能力を例にとると、両者の結びつきはそれほど強いものではないでしょう。もちろん、戦略思考能力を発揮するためには様々な視点や観点を認識する必要がありますが、人間力が色濃く出てくるというよりも、純粋にピアジェ的な認知能力が発揮される知性だと考えられるため、両者の相関関係はそれほど高くないかもしれません。

要するに、フィッシャーが述べるスキル領域のうち、どんな認知スキルを取り出すかによって、それがキーガンで言うところの人間力と強く結び付くこともあれば弱く結び付くこともあるということです。

131. カート・フィッシャーの「ダイナミック・スキル理論」の要約

これまでいくつかの記事で、ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャー (Kurt Fischer) が提唱した発達理論「ダイナミック・スキル理論 (Dynamic Skill Theory)」を取り上げてきました。この理論は、現在存在する意識発達・知性発達理論の中でも最重要理論であると思われるため、もう一度ダイナミック・スキル理論をわかりやすくまとめ直したいと思います。

カート・フィッシャーが1980年に出版した“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills”という優れた論文の中で提唱された「スキル理論」を原型とし、ダイナミック・スキル理論は、30年以上に及ぶ多様な実証研究の成果に基づいて構築されています。ダイナミック・スキル理論の根幹には、「人間の思考や行動は変動的なものであり、それらは文脈に応じて動的に変化する」という思想があります。

子供であれ成人であれ、現実世界の具体的な活動に従事する際に、活動内容や活動環境が変化すれば私たちの思考や行動も動的に変化する、という指摘は当たり前のように思えるかもしれません。

しかし、これまでの発達論者の多くは、人間の心が持つそのような動的な特性を総じて蔑ろにしています。現在世間で知れ渡っている多くの発達モデルは、フィッシャーが指摘している心の動的な側面を適切に反映していません。

実際のところ、ほとんどの発達モデルは、意識の発達構造を「静的」あるいは「固定的」なもののみなしてしまっているのです。例えば、前期ピアジェの「普遍的発達構造」やチョムスキーの「内在的言語モジュール」などは、心の構造を静的・固定的なもののみなしてしまい、文脈に応じた変動性や環境からのフィードバック作用をはじめとする、心の動的な側面を正確に映し出しているとは言い難いです。

心の構造を静的・固定的なものではなく、動的なものとしてとらえる際に重要となるのが「変動性」(variability)という概念です。変動性とは、私たちの思考や行動は置かれている文脈に応じて様々に変化するということを意味します。例えば、教育の現場において、昨日できていたことが、翌日、状況・状態が変化するとできなくなっていた、というようなことは頻繁に起こります。

もちろん、こうした事柄は、子供だけに当てはまるわけではなく、成人にも当てはまります。また、さらに微視的に眺めると、私たちは刻一刻と変化する周囲の状況や感情の状態などに影響されて、瞬間瞬間に異なるレベルのパフォーマンスを発揮しています。

驚くべきことに、これまでの発達研究では、こうした変動性は統計的な「異常値(outlier)」として扱われる傾向にありました。しかし、ダイナミック・スキル理論では、それを異常というよりもむしろ「通常」の現象として扱います。正にそうした変動性こそが人間の心理的な発達のダイナミズムを解き明かすための重要な要素として捉えられるのです。

要約すると、フィッシャーのダイナミック・スキル理論の核となる思想は、私たちが現実世界で発揮するパフォーマンスは、常に変動しているということです。なぜなら、私たちのパフォーマンスを生み

出す心の構造がそもそも静的なものではなく、動的なものであり、そのときの状況、他者との関係性、自己の身体的状態等と常に相互作用しながら変幻自在に変化しているからです。

【追記: エコロジカルマインドと華嚴的心】

人間の知性・意識・心の発達理論を探求する中で、生態心理学的な心の捉え方と華嚴宗的な心の捉え方がフィッシャーのダイナミック・スキル理論と関係性が深いと思うようになりました。

生態心理学の提唱者の一人、ジェームズ・ギブソンは、私たちを取り巻く環境が心や行動に与える意味のことを「アフォーダンス」と名付けました。

フィッシャーも同様に、取り巻く環境に応じて私たちのパフォーマンスレベルは動的に変動すると述べているため、環境によって影響を受ける「エコロジカルマインド」という発想は、フィッシャーのダイナミック・スキル理論と大きな接点があるでしょう。

また、フィッシャーの理論を学習しながら、応用数学の一分野ダイナミック・システム理論を探求し、そこからシステム理論と仏教哲学の親和性などを見出しました。

特に大乘仏教の宗派の一つである華嚴宗の中心思想とフィッシャーのダイナミック・スキル理論には大きなつながりが存在すると思います。

華嚴宗の中心思想は、現実世界のリアリティは個別具体的な事物が相互に関係しあい、重層的かつ無限に重なり合っているという考え方です。

実際に、フィッシャーのダイナミック・スキル理論に横たわる根幹思想は、私たちの知性は様々なものと相互に関係しあい、無限に広がる関係性の網の目の中で発現されるものであるとしています。

ダイナミック・スキル理論という西洋的な心の理論を探求することを通じて、私の中の東洋を発見することにつながり、フィッシャーの研究成果とその理論に対して大変感謝しています。

132. 「ダイナミック・スキル」の再定義

ハーバード大学教育大学院のカート・フィッシャーが提唱したダイナミック・スキル理論でいう「ダイナミック・スキル」とは一体何を意味するのでしょうか？「スキル」という言葉を聞くと、私たちは何か特定の「技術」のようなものをイメージしてしまうかもしれません。

しかし、ダイナミック・スキル理論で言われる「スキル」とは、私たちの思考や行動が組織化されたものを表します。つまり、「ダイナミック・スキル」とは、置かれている状況や感情状態などによって動的に組織化された思考・行動と捉えることができます。

さらに噛み砕いて説明すると、ダイナミック・スキルとは人間が環境に適応するために発揮する、生きていく力そのものだとも言えます。刻一刻と変動する環境に対して、私たちが発揮する認知やアクションを包括して「ダイナミック・スキル」と呼びます。

ダイナミック・スキルを定義づける上で、最も大切なことは、スキルは特定の文脈において発揮されるということです(文脈依存性)。言い換えると、スキルとは特定の文脈の中で発揮される、具体的な活動を生み出す思考や行動とすることができます。

私たちは、どんな状況にも適用可能な一般的なスキルを持って生きているわけではありません。そうではなく、私たちは特定の文脈に基づいたスキルを発揮しながら生きているのです。

例えば、ビジネス社会という文脈で要求されるスキル、スポーツという文脈において要求されるスキル、子育てという文脈において要求されるスキルなど、特定の文脈の中で発揮されるスキルというのは常に具体的な文脈の中で突きつけられる課題や問題に対応したものなのです(タスク依存性)。

また、私たちのスキルは、あらかじめ定められた法則によって発達するわけではありません。私たちのスキルは本質的に、具体的な文脈の中で実際の活動にとりくむ中で発揮される、文脈とその活動(タスク)に依存したものなのです。この点を考慮すると、スキルは具体的な文脈を前提とした実践活動を通してのみ発達するものであるということがわかります。

また、このように具体的な文脈の中で開発されたスキルは、徐々に異なる文脈にも応用されていき、より多様な文脈で発揮される適用範囲の広いものとして確立されていきます。これらの特徴を考慮し、カート・フィッシャーは、動的に変化する文脈に基づいて発揮されるスキルを「ダイナミック・スキル」と命名するに至ったのです。

【追記:ビジネス社会で蔓延する浅薄な脳力開発】

ビジネス社会では、「プレゼンテーションスキル」、「ロジカルシンキング」、「問題解決脳力」という知的脳力を鍛錬する重要性が声高に叫ばれています。事実、書店に行けば、それらの脳力を開発する必要性や鍛錬方法について説明された書籍で溢れていることに気づくでしょう。

これらの脳力もフィッシャーで言うところの広義のスキルに該当します。しかしながら、それらの脳力を真に発動させる深層脳力の存在にまで言及した書籍やトレーニング手法はほとんど存在しません。

フィッシャーが主張するスキルというのは本来、「プレゼンテーションスキル」、「ロジカルシンキング」、「問題解決脳力」といった表面的なスキルも含みながら、それら一つ一つの知的脳力を発動させる深層的な装置のことを意味しています。

イメージとしては、プレゼンテーションスキルというアプリケーションを動かす固有のオペレーティングシステム(OS)が存在し、ロジカルシンキングというアプリケーションを動かす独自のOSが私たちの意識空間・知性空間に存在しているのです。

認知的発達心理学の知見に基づくと、一つ一つのアプリケーション的なスキルを作動させるOSの質的差異(そのスキルの深さや習熟度)を測定することが可能であり、さらに個別のOSごとに脳力を鍛錬するようなトレーニングプログラムの構築も可能になります。

日本のビジネス社会においても、そろそろ表面的な脳力を議論することから脱却し、深層的な脳力の存在を認知する必要があるのではないのでしょうか。今後も表面的なスキルを動かす深層脳力の存在を蔑ろにした人材開発や人材教育を提供し続けていると、いつまでたっても深みのある脳力を開発することはできないでしょう。

133. ダイナミック・スキル理論誕生史:パラダイムの波に晒されて

歴史を遡ると、人間の意識の発達理論は、100年以上も前に発達心理学の始祖と呼ばれるジェームズ・マーク・ボールドウィン (James Mark Baldwin 1861-1934) によって提唱されています。それほど長い歴史があるにもかかわらず、これまでどうして発達研究は心の動的な特性を蔑ろにしたのでしょうか?

確かに、注意深く文献調査をしてみると、1980年代には新ピアジェ派の代表格であるカート・フィッシャーやロバート・シーグラール (Robert Siegler) が、発達の変動性に着目し、研究を進めていました。しかし、それらの研究成果は、発達研究のコミュニティを支配する当時のパラダイムの陰に隠れてしまい、これまでほとんど注目されることはありませんでした。

当時の発達理論のパラダイムは、発達現象を静的なものとして捉えており、結果として、発達現象が持つ変動性に注目する研究を虐げてしまい、そうした現実を隠蔽してしまったのです。発達の変動性が隠蔽されてきたという事実は、何も新ピアジェ派が登場した時代だけではなく、実際はそれ以上も前から顕在化していました。

現代の発達心理学の礎を築いたジャン・ピアジェ (Jean Piaget 1896-1980) が最終的に作り上げた理論は静的な構造モデルでしたが、実際のところ、ピアジェは発達が持つ変動性を正確に認識していたと言われています。

つまり、ピアジェは、与えられるタスクが変われば、パフォーマンス・レベルが変動するという現象を認識していたのです。しかしながら、ピアジェはそうした認識を持ちながらも、それを説明する理論モデルを構築することはありませんでした。

ピアジェを含め、どうして多くの発達理論家は、静的な構造モデルを提唱することに留まってしまったのでしょうか? その大きな理由は、欧米心理学の根底に流れるデカルト的な認識論にあります。デカルトが西欧哲学・心理学にもたらした功績は計り知れないものですが、それと同時に、固有の制約・限界を生み出してしまったのも紛れもない事実です。

特に、デカルト的な認識論は、人間の心という動的なシステムを生物学的・文化的な他のシステムと切り離してしまいました。すなわち、デカルト的なアプローチは、心を環境・文化・身体との間にある相互作用から切り離してしまい、それらの相互作用を無視する形となりました。

実際には、そうした相互作用は心の複雑性や動的な特性を生み出す重要な要素なのです。こうした要素を蔑ろにした結果、デカルト的な認識論は、心を静的・固定的なものとして捉える思想を醸成することになってしまったのです。

【追記:「何者でもないものになるためには、まずは何者かにならねばならない」】

ロバート・キーガンの理論で言う、発達段階4(自己著述的段階・自律的段階)から5(相互発達段階)への道は、「個」というものを確立する個性化の段階からそれを脱構築する段階へ移行するプロセスを表しています。

この成長プロセスはまさに「If you want to be nobody, you have to be somebody first. (何者でもないものになるためには、まずは何者かにならねばならない)」と述べた心理学者ジョン・イングラールの言葉が見事にそれを表現していると思います。

実際には、確固たる個を確立する段階4へ至るプロセスは薔薇の道であり、「何者かになる」ためにはそれ相応の覚悟が要求されます。ある程度、成人以降の知性発達理論に習熟してくると、現代社会で声高に叫ばれている「個性」や「個の確立」という言葉は、美辞麗句か単なるお題目でしかないことに気づくでしょう。

現代社会において、キーガンが述べている発達段階4に到達するのは極めて困難な課題として私たちにのしかかっているのです。

134. ダイナミック・スキル理論誕生史:デカルト的認識論を超えて

それでは前回の記事で紹介した「デカルト的認識論の呪縛」を一步先に進めて、今回の記事は、デカルト的認識論が支配的であった当時の発達思想(メタファー)を概説するとともに、デカルト的

認識論を乗り越えたダイナミック・スキル理論が提唱した新たな発達思想(メタファー)を紹介します。

ダイナミック・スキル理論誕生前の発達科学の世界において、デカルト的認識論から派生して、「人間の心は階段状に発達していく」という説明論理が支配的でした。言語学者のジョージ・レイコフ (George Lakoff) が指摘しているように (Lakoff & Johnson, 1980)、私たちの思考や行動はメタファーによって強く影響を受けています。それと同様に、科学的な概念や理論というのも、特定のメタファーによる制約を受けています。

つまり、心の発達を静的なものと捉えてしまう既存の発達理論の大多数は、欧米心理学の世界に広く浸透した「階段」あるいは「梯子」のメタファーによって強く影響を受けていると言えるのです。そうしたメタファーは、発達を一つの構造から次の構造へ移行する直線的なプロセスであるかのように、われわれの思考や発想を誘導してしまうのです。

このような発想の下では、人間が持つ動的な活動を適切に理解することが困難となってしまいます。つまり、発達プロセスを階段状のものとして捉えてしまうメタファーでは、私たちのパフォーマンスに内在する変動性を適切に説明することができないのです。

そうした既存の発達研究のパラダイムに対抗して、カート・フィッシャーは、発達が持つ変動性と多様性を考慮した「発達の網の目構造」(developmental web) という新たなメタファーを提唱しています。「発達の網の目構造」とは、様々な発達領域がお互いに関係し合い、複雑なネットワークを構成しながら発達していくという発想です。

このメタファーで提唱されているのは、発達のプロセスに決められた順序や形というものには存在せず、私たちが置かれている文脈や具体的な活動の種類によって、網の目(糸)が複雑・多様に伸びていくということです。例えば、何か新しい技術や知識を習得しようとする際に、最初はその網の目構造を構成する糸は非常に脆弱です。

しかし、修練を積むにつれて、あるいは外部からの支援を受けるに伴い、紡ぎだされた糸が徐々に強固なものとなっていきます。仮に糸が途切れてしまったとしても、私たちは再び実践を開始するこ

とによって、その糸を新たに紡ぎだすことができます。そのようにして私たちは、社会的な文脈の中で他者や環境と相互に影響を与えながら、より複雑なスキルのネットワークを構築していくのです。

カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論では、発達をこのような網の目構造とみなします。多様な文脈の中で発揮される一つ一つのスキルは他のスキルと絡み合う形で発達し、感情の状態や周囲の状況、そして外部からの支援の変化によって、発揮されるレベルが動的に変化するものとして捉えられているのです。

135. 映画「バケモノの子」を鑑賞して:発達理論の観点より

「偉大な芸術は、あなたを、あなたの意志に反して、つかむ。そして、あなたの意志なるものを宙づりにする。あなたは、欲望、渴望、自我、自己収縮などから解放された、静かな深い森の中に開かれた小さなオープン・スペースに招き入れられる。この意識の中の静かなオープン・スペースを通して、高次の真実、微細な啓示、深い結合の光が射してくる。一瞬の間、あなたは永遠なるものに触れる」ケン・ウィルバー『統合心理学への道』より

先日、傑出した映画作品を鑑賞しました。細田守監督が創出した「バケモノの子」というアニメーション映画です。師弟関係・親子関係・教育・学習・人間としての成長に関心のある全ての方に映画館に足を運んでいただき、一度見ていただきたい作品です。

冒頭で紹介したウィルバーの引用文にあるように、私はこの作品に間違いなく掴まれ、私の中の全てのものが宙づりにされ、白日のもとに晒され、それら全てからの解放と意識の変容が同時に生起するという不思議な体験に包まれました。

ロサンゼルス在住時代、当時のルームメイトから細田監督の前作「おおかみこどもの雨と雪」を推薦されて見たところ、私が通っていた大学と4年間過ごした街が映画の舞台として描かれていた点、主人公「花」と私の母がやけに重なって見えたという点において、作品の魅力に引き込まれた感がありました。

今回の作品でも自分の人生と重ね合わせてしまう点が多く、途轍もない愛情と剥き出しの内なる闘と攻撃性をぶつけて自分を育ててくれた父との親子関係、人間の意識の発達に関する思想上の闘

争をさせてくれたオットー・ラスキー先生、喧嘩別れをしたテオ・ドーソン先生との師弟関係の記憶が鮮明に蘇ってきました。

この作品の装いは間違いなく、人間の子と一匹のバケモノが生み出す成長ストーリーです。ただし、この作品を見た人であれば、この作品にはそれ以上のものが内包されていることに気づくでしょう。

以下、人間の意識や心の成長・発達を専門とする私の個人的な鑑賞録を列記させていただきます。主人公の「九太(きゅうた)」の師匠「熊徹(くまてつ)」の言葉「意味なんかでめえで見つけるんだよ！」というセリフにあるように、私がこの作品を通じて見つけた意味を記述していきます。

「師弟関係」に対する再考

この作品を通じて描かれている大事なテーマの一つとして「師弟関係」が挙げられます。作品中、実に様々な形の師弟関係が描かれていることに気づきます。皆さんはこれまでどのような師弟関係を経験し、現在どのような師弟関係を結んでいるのでしょうか？

最初に取り上げるべきテーマは、バケモノである熊徹と主人公の九太が結んだ師弟関係でしょう。映画「セッション」でも見られた荒くれ者の師匠とその弟子という構図を思い起こさせるような師弟関係です。修行の最中、常に九太と熊徹はぶつかり合い、九太は師匠である熊徹を乗り越えていこうとします。

熊徹は九太という弟子に対して、心底深い愛情を持ちながらも、不器用かつ高圧的な剣術指導を徹頭徹尾行っていきます。熊徹は、一つの技術に対して稚拙な言語化しかできず、あまりにも感覚的な指導しかできません。

一見すると、熊徹は現代の教育論的な観点から言うと、指導者として失格の烙印を押されるでしょうし、正当な学習理論や発達理論の観点から見ても、正しい指導者とは言えないかもしれません。しかし、私はこれはある意味で傑出した人間を育てる正しい指導のあり方を反映しているとも思います。

正直なところ、これまでの記事で紹介してきたカート・フィッシャーの「発達範囲」を考慮した教育手法やレフ・ヴィゴツキーの「最近接発達領域」に基づいた教育手法などを活用すれば、優秀な人間を育てることはできても、傑出した人間を育てることはできないのではないかという疑問を最近持っています。

指導者として才能を見抜く眼がない場合、そして弟子の闇や攻撃性を触発し、それと対峙できない力量の指導者の場合、フィッシャーやヴィゴツキーが提唱するような指導方法で留めておくのが望ましいでしょう。

しかし、熊徹はそのような指導を九太に施しませんでした。熊徹は後からやって来た他の弟子たちに見込みがないことを本質的に見抜き、九太だけが突出した何かを持っていると直感的に察知したのでしょう。

結局のところ、弟子の中に潜む闇や攻撃性を触発し、それと対峙し、それを受け止められないような指導者は傑出した人間を育てることはできないでしょうし、自分の中の闇と攻撃性を総動員して師匠に対峙できない人間も傑出した存在になることはできないのではないかと思われました。

一方、人間界における九太の師匠は楓(かえで)という女子高生でしょう。9歳からバケモノの住む世界で過ごしていた九太は、読み書きがおぼつかなく、楓から教えることになります。

「あんなに楽しそうに学んでいる人を見たことがない」という楓のセリフから読み取れるように、読み書きを覚えた九太は、自分の関心事項を嬉々として自ら探求していきます。旧態依然とした現代教育システムのもとに育った楓と自らの内発的な探求意欲に突き動かされて学びを深めていく九太との対比は大変興味深かったです。

学習に関して、楓という良き指導者がいたからこそ九太は学ぶきっかけを得たのだと思いますが、人間が何かを学ぶというのは本来、こういう姿勢でこういう形で進んで行くものなのではないかと思われました。

内なる闇と心の穴

この作品では、人間誰しもが持つ闇を基本的に肯定して描いているため、救われた思いになった人は私だけではないでしょう。作品の中で内なる闇は「心の穴」として描かれています。それはまさに、フロイトやユングが言うところの「心のシャドー」でしょう。

「一郎彦」というバケモノ界に紛れ込んだもう一人の人間は、自分の闇に飲み込まれ、自らのシャドーを九太に投影していきます。一郎彦は自分のシャドーに気づかず、それを投影していることに最後まで気づきませんでした。九太は「一郎彦の問題は、俺の問題でもあるから」と述べており、自分の影を認識し、それと対峙する道を選択しました。

影との対峙を決意してから始まる物語のラストシーンには、多くの大切なものが凝縮されていると感じました。

九太が天性のものとして兼ね備えていた相手の特性を読む眼(生得的発達)と剣に姿を転生させた熊徹が九太の胸に宿ることによって開花した熊徹から継承された剣術(経験論的発達と輪廻転生)が組み合わせられ、九太が鞘から剣を引き抜く原動力となったのは、九太を支えてきた全ての人やバケモノ達との関係性の中で育まれたエネルギー(縁起的な因果連鎖と関係性)でした。

そして、切り裂いたものは、一郎彦の闇でもありかつ自分の中の闇でした。切り裂いたというよりも、精神統合学的には、健全な闇を「再所有」したと表現した方がいいかもしれません(参考「ジョンエフケネディ大学留学記」p.87-92)。

まとめ

この作品を見ることによって、ここでは書き足りないぐらいの論点に気付かされました。ラストシーン終了後、Mr.Childrenの「Starting Over」が終わるまで、正直なところ身動きができませんでした。皆さんはどんな「胸の中の剣」を持っていますか？

【追記:その他の論点に関する備忘録】

ある芸術作品が世に出された瞬間に、その解釈と評価は私たち鑑賞者側に委ねられます。作品に何を感じ、何を見出すかは、鑑賞者の意識の発達段階とこれまでの知識や経験などと強い相関関係があると言えるでしょう。

以下、上記で取り上げることのできなかった論点について備忘録を兼ねて列挙しておきます。

・前作、「おおかみこどもの雨と雪」では、主人公は夫を亡くしており、本作品では主人公にとっての母親が亡くなっているという設定です。さらに、本作品では主人公にとって唯一無二の存在である熊徹が物理的にこの世から存在しなくなるというのもある種の喪失です。人間の成長を語る上で、「喪失感」というのは極めて欠かせない要素なので、この辺りについてまた何か書ければと。

・育てる者と育てられる者との境界線の消滅

・作品が描き出す、プラトン、アリストテレス、プロティナスから連綿と受け継がれる神秘哲学思想

・誰しも経験する「ズレ」がもたらす成長:自分の中でのズレ、環境とのズレ、文化とのズレ、時代とのズレ

・孤独であることの意義と他者の存在

・バケモノの世界と変わらぬ人間の世界(バケモノが潜む日常世界、人間が持つバケモノを凌駕する魔力や破壊力など)

・胸の中の剣としての父・師匠:師匠の喪失と胸の中で生き続けるもの

136. 絶えず乱高下する成長・発達プロセス

記事「134. ダイナミック・スキル理論誕生史:デカルト的認識論を超えて」では、カート・フィッシャーが提示した示唆深いメタファーである「発達の網の目構造」について紹介しました。

今回の記事は、カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論に含まれる別の重要な考え方を紹介していきます。それは、「発達というプロセスは必然的に退行や停滞を含む非線形的なものである」ということです。

一般的に、既存の発達理論は、発達を階段状あるいは梯子のようなイメージで捉えており、それらの発想の下では、発達が直線的なプロセスとみなされる傾向にあります。そのため、「発達とは常に上昇を辿るプロセスである」という幻想を私たちに抱かせることになります。

しかし、ダイナミック・スキル理論を用いた近年の研究結果が明らかにしているのは、心の発達というのは直線的なプロセスではなく、乱高下を前提とした紆余曲折するプロセスだということです。

既存の発達理論がある意味「上昇志向的」な発想に支えられていたのとは対照的に、ダイナミック・スキル理論においては、発達が不可避免的に内包する「上昇」と「下降」という対極性が見事に統合されているのです。

ここで注意が必要なのは、私たちが具体的な文脈において発揮しているスキルは、際限なく乱高下しているわけではなく、ある一定の幅の範囲内で乱高下をしているということです。この現象を説明する際に鍵を握るのが、「最適レベル」と「機能レベル」という概念です。

「最適レベル」(optimal level)とは、他者や環境からのサポートを得ることによって発揮できる最も高度なスキルレベルのことです。一方、「機能レベル」(functional level)とは、他者や環境からの支援なしに発揮することができる最も高度なスキルレベルのことです。

カート・フィッシャーは、両者のスキルレベルの間に存在する溝(ギャップ)のことを「発達範囲」(developmental range)と呼んでいます。私たちのスキルは、与えられたタスクの種類や置かれている文脈に応じて、乱高下をしながら動的に変化していきます。つまり、わたしたちのスキルは、最適レベルと機能レベルの間——発達範囲——の中で発揮されるのです。

これまでのところ、ダイナミック・スキル理論の概略、誕生背景、そしてその代表的な重要概念について紹介してきました。次回の記事では、ダイナミック・スキル理論がどのように企業社会や教育の世界に活用されているのかを簡単に見ていきたいと思えます。

【追記:芸術体験としての読書】

ここ最近、書物との向き合い方について模索しています。

私は書物を読みながら、基本的には思いついた考えやイメージなどをその書物に書き込むということをしていたのですが、どうもこれだけだと読書体験に深みもたらされないと感じています。

確かに、漠然と書物を読むという行為とは違い、考えやイメージを書き残すことによって一段深い読書体験につながっていると思います。

しかし、どうもそれだけでも不十分である気がしています。実際に、読書体験が終わった後に、どうも肚に引っかかりがある感覚、何やら咀嚼不良・消化不良のような身体感覚に包まれることが頻繁にあります。

その打開策として、アイデアが飛躍していますが、読書という体験をある種の芸術体験に昇華させられないかと考えています。

井筒俊彦先生が指摘しているように、言語は幻覚剤のようなものであるため、書物を読むという行為の最中に活字情報から生み出される色や音などを含め、それらを書物に書き残していくと、読書を通じて絵画制作や音楽制作と似たような体験をすることが可能になるのではないかと。

活字情報を無味乾燥な活字情報として記憶にとどめることの限界を最近感じているため、上記の絵画的・音楽的読書法を実践していこうとふと思いました。書物を読みながら、どのような具象画・抽象画が眼前に立ち現われ、どのような交響曲が聴こえてくるでしょうか。

137.性格類型テストや360度評価の限界と新たな測定手法

ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーが提唱したダイナミック・スキル理論は、近年、教育現場や企業組織において広く活用され始めています。カート・フィッシャーの共同研究者であったセオ・ドーソン(Theo Dawson)とフィッシャーの弟子たちによって設立された、米国のLectica, Inc.

という組織は、FBIやCIAといった国家機関をはじめ、様々な企業組織にダイナミック・スキル理論に基づいた発達測定サービスを提供しています。

Lecticaは、ダイナミック・スキル理論を実務の世界でより有効に活用できるように、LAS (Lectical Assessment System) という独自の測定システムを開発しました。そして、このLASに基づいて、異なる焦点や目的を持つ数多くの発達測定手法が開発されています。

代表的なものは、LDMA (Leadership Decision Making System) と呼ばれる発達測定です。LDMAは、組織のリーダーが意思決定の際に発揮する様々なスキル・セット(視点取得能力、共同能力、論理思考能力など)の発達レベルを詳細に測定するものです。LDMAは、主に企業における人材開発や人材マネジメント、特にリーダーの育成・管理に対する社会からの要請に応じる形で誕生しました。

現在のビジネス社会を見渡してみると、性格類型テストや360度評価などの測定手法が存在しています。確かにこれらの測定手法はリーダーの性格や行動特性を明らかにしてくれます。

しかし、それらの測定手法で可能なのは、リーダーの行動特性や性格類型を分類することであり、リーダー各人が持つリーダーシップ能力の「高さ」や「深さ」を測定することはできません。

つまり、既存のアセスメントは、リーダーの行動や性格の裏に隠された構造を明らかにしてくれないということです。実際には、リーダーの行動を生み出す深層的な能力というものが存在しており、それは発達心理学の世界において「認知構造」と呼ばれます。LDMAは、そうした深層的なリーダーシップ能力の源泉を解明するのです。

リーダーが組織運営上の問題に直面した時に、その対処方法にはパーソナリティのタイプだけではなく、その人が持つ深層的な世界観・認識の枠組みが密接に関係しています。そうした世界観・認識の枠組みは心の発達と共に複雑性を増し、深まりを見せます。残念ながら既存のアセスメントでは、認知構造の複雑性を測定することができません。

言い換えると、既存の測定手法は行動パターンの分析に終始してしまうため、問題発見能力の深さ、問題解決能力の深さ、チームをまとめあげる能力の深さなどを見落としているということです。そうした状況を打破するべく、LecticaはLDMAという発達測定手法を世に送り出したのです。

【追記:LDMAの形式】

私がLecticaという組織で研究者としてインターンをしている時に、LDMAを受けることが要求されていました。アセスメントは記述形式で実施され、コンピューター上で全ての回答を行います。

アセスメントのプロセスは、コンピューターの画面上に一つのケースが与えられ(例えば、企業組織の中で起こっている人間関係の問題など)、ケースに準じて設問が5つほど設けられており、それらに回答していく形で進められます。

これら一つ一つの質問は、リーダーとしての意思決定能力に付随するサブスキル(例えば、問題発見能力や共同能力など)に対応しています。つまり、一つの設問に回答すると、あるサブスキルの認知構造レベルが明らかになります。

現在、アセスメントは英語でしか受けられませんが、参考までにLecticaのウェブサイトを紹介しておきます。<https://lectica.org>

138. 「統合心理学」としてのダイナミック・スキル理論

これまで紹介してきたように、新ピアジェ派の伝統はジェームズ・マーク・ボールドウィンから、ジャン・ピアジェ、ローレンス・コールバーグ、カート・フィッシャー、セオ・ドーソンに脈々と受け継がれてきました。この伝統は、人間の認知とは何か、それはどのように発達するのかを解明しようとする情熱や試みの上に積み重なってきたものです。

新ピアジェ派の理論モデルが持つ包括性や説明力を考慮すると、彼らは単に自我の発達を論じることをせず、それを含んでいながらも超越していたと言えます。現代における発達心理学の多くは、心の一つの側面や特定の機能を解明することに焦点を当てているのに対し、新ピアジェ派はより包括的な心理学理論を提供しています。

特に、カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論をケン・ウィルバーのインテグラル理論の枠組みで捉え直すと、それは意識段階 (Levels)、多様な知性領域 (Lines)、意識の状態 (States)、意識の分類 (Types) などを包摂しているため、真の意味で「統合心理学」と呼んでも過言ではないでしょう。

そして、統合心理学としてのダイナミック・スキル理論は、多数の実証的な研究に裏打ちされており、さらには数多くの発達現象を説明する強固な理論モデルを提供しています。

例えば、意識の構造的発達、意識の発達と脳の組織化の関係性、発達が持つ非線形的なプロセス、発達プロセスを形成する感情の役割、道徳的知性と推論能力の発達、トラウマが自我の形成に与える影響、学習障害の性質と発達など、枚挙にいとまがありません。

こうした例からわかるように、新ピアジェ派の理論的枠組みは実に生成力のあるものなのです。「生成力がある」というのは、一つの理論が対象とする射程が広く、実務の世界における応用範囲が広いということを意味しています。

さらに、新ピアジェ派の理論は取り扱う対象範囲が広いと、新ピアジェ派の理論を学習すると自我の発達理論など他の理論モデルを理解することがより促進されます。

例えば、フィッシャーはトラウマや虐待などの影響下における自己認識力の発達を研究し、これまでの自我発達理論では説明のできなかった多様な発達プロセスを明らかにしました (以前紹介した「発達の網の目構造」)。

この優れた研究の重要な発見事項は何かというと、個人の自我は日常生活における人間関係によって大きく形が変わり、自己認識力や他者認識力はそうした関係性に依存して異なる発達プロセスを持つということです。虐待を受けた子供はしばしば発達遅延を経験しますが、フィッシャーの研究成果が示しているのは、そうした子供は通常とは異なる発達領域の中で高度に発達している可能性があるのです。

つまり、自我の形成プロセスは単一のものではなく、多様な発達プロセスが存在するということです。そして、そうした多様なプロセスは感情や人間関係によって大きく影響を受けるということが大事な点になります。

139. 知性発達理論の影と闇、そこからの救済

新ピアジェ派の功績は、発達プロセスを説明する優れた理論的枠組みを提唱しただけではなく、多様な発達プロセスに内包された複雑性を解析する測定手法を開発したことにあります。実際に、新ピアジェ派が提唱する発達科学は、既存の心理統計手法の領域を再構築し、測定手法の革新をもたらしたと言えます。

新しい測定手法が新しい科学を生み出したという点を考慮すると、私のメンターであったセオ・ドーソンのLASという測定手法はまさに知性発達測定の新たなパラダイムを打ち立てたと言えます。知性発達科学の今後を見据えると、新ピアジェ派が提唱しているようなメタ理論や応用数学のダイナミックシステム理論などに準じて、今後より躍動的に進展していく可能性が高いと見ています。

もし新ピアジェ派の理論やダイナミックシステム理論に基づく厳密な測定手法が浸透すると、知性発達理論に基づいた、より洞察に溢れる教育実践が大規模に展開されるかもしれません。また、教育の領域のみならず、企業社会における人材開発や人材育成にも多大な貢献を果たすと見ています。

しかしながら、新ピアジェ派のアプローチが知性発達理論や教育に果たす役割というのは、これまであまり議論されてきませんでした。フロイト以降、「心理学者というのは救済をもたらす司祭に取って代わった」と言われることがあります。つまり、心理学者が述べることは不可視かつ神聖なものとしてみなされる傾向にありました。

これは発達心理学の領域においても当てはまり、多くの人は発達心理学者が提唱する段階モデルに対して妄信的であり、その妥当性や信頼性について深く検証していないのです。あるいは、少しでも立ち止まって考えるということをしていないのです。

例えば、「あなたはティール(teal)である」「あなたはヴィジョン・ロジックの発達段階にいる」などという言葉は、ウィルバーの思想に依拠したインテグラルコミュニティーで頻繁に見受けられます。

しかし、あなたは本当にティールなののでしょうか？ティールという段階は何を意味するのでしょうか？そうした問い掛けすらもないまま、段階表記を盲目的に受け入れている様子は心理学とは言いがたく、どこか宗教的ですからあります。さらに、発達心理学の段階モデルを安易に活用して議論を進めた結果、当該コミュニティーでは自己肥大化現象が起きています。

新ピアジェ派のアプローチは、こうした「カルト的」な自己肥大化現象を解体させる力を持ち、発達段階というデリケートな事柄を適切に取り扱う下地を提供してくれます。また、発達支援に携わる実務家や教育関係者に有益な知識や実践ツールも与えてくれます。

【追記:ハリー・スタック・サリヴァンがダイナミック・スキル理論に与えた影響】

ダイナミック・スキル理論の誕生背景には、ハリー・スタック・サリヴァンによる多大な貢献があります。サリヴァンは新フロイト派に属する精神科医かつ精神分析家でした。ジェーン・ロヴィンジャーが指摘しているように、サリヴァンは「自我発達理論の父」と称されるにふさわしい功績を残しています。

フィッシャー自身が述べていますが、彼のダイナミック・スキル理論はサリヴァンの自我発達理論から多くの洞察を得ています。実際に、フィッシャーは1970年代から80年代の前半にかけて、フロイトが提唱したエディプスコンプレックスという概念を中心に、精神力動理論や自我発達理論を探求していました。

確かにフィッシャーは徐々に自我発達理論から離れていきましたが、サリヴァンが述べるところの情動の統制機能や自尊心など、感情が発達に及ぼす役割を継続して探求しています。

140. 「弁証法思考」の誤解:オットー・ラスキーが提唱する高度な思考形態

現在でも何かあるたびにやり取りをしているのですが、JFK大学院時代にお世話になっていたオットー・ラスキー先生が執筆した論文や書籍を少しずつ読み直しています。私はラスキーの測定手法

から距離を置いているというのが現状ですが、人間の意識に関する彼の理論モデルから今でも多くのことを学ばされます。

ドイツの哲学者かつ社会学者のテオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマーといったフランクフルト学派を代表する人物からラスキーは手ほどきを受けていたことが影響してか、現存する発達心理学者の中ではあまり見られないような角度から人間の意識の成長・発達を捉えています。

私が二年半にわたって直接師事をしていたオットー・ラスキーの発達思想を少しずつ紹介していきたいと思います。ラスキーはフランクフルト大学で哲学に関する博士号を取得し、特にヘーゲル哲学を探求していたと聞いています。

その影響もあり、ラスキーの認知的発達理論では「弁証法思考 (dialectical thinking)」を重要な概念として捉えています。端的に述べると、弁証法思考は、おおよそ20代半ばの成人(帰属する文化によって年齢は前後する)がピアジェで言うところの形式論理思考を十分に習得して初めて使えるようになる高次の思考方法です。

ラスキーが指摘しているように、弁証法思考は形式論理思考と強く結びついた科学技術文明(特に西洋文化)によってその芽が開花するのを妨げられています。ラスキーはよく私に、東洋における弁証法思考の特徴と現状を尋ねていましたが、東洋、特に日本においても弁証法思考の発芽は妨げられているという状況に変わりはないと思います。

つまり、日本において形式論理思考の鍛錬がそもそも不十分であるために、弁証法思考という高次の思考形態が育まれようもない状況にあると見ています。弁証法思考という高度な思考形態を養うことを阻害している日本の教育事情よりも(この論点の方が重要だと思いますが)、今回の記事では簡単に弁証法思考の輪郭を明らかにしておきたいと思います。

弁証法思考とは形式論理思考の完成後に誕生する高度な思考形態です。しかし、弁証法思考は論理的思考に取って代わるものではなく、論理的思考に依存する形で機能します。ヘーゲルが述べたように、弁証法思考は、究極的なまでに自己批判的な態度を保ち、自己の存在すらも疑い、主体と客体を二分するような発想を超えた思考法と言えるかもしれません。

世間一般的に言われている弁証法思考は、ヘーゲルが述べた弁証法のごく一部を切り取り、「命題と反命題があり、それを統合するような思考法」としか認知されていないような気がします。ラスキーが指摘するように、弁証法思考は「二つの概念を同時に頭に描き、それを統合する」以上のものです。

弁証法思考は互いに相異なる二つの概念を捉えることであり、あるいは二つの概念を排除することであり、そして思考をより前進させるために、サルトルが述べた「否定性 (negativity)」を活用する思考法であると言えます。要するに、思考する者の頭の中にある否定性を認識することによって、動的な思考運動を生み出すことができるのです。

この定義に基づくと、「人間は必ず死ぬ。そしてソクラテスは人間である。それ故にソクラテスは必ず死ぬ」という有名な哲学的推論はそうした動的な思考運動に基づいていないと言えます。それは、同じ説明内容を単に異なる方法で述べることは単なるトートロジーにすぎません。

科学主義的世界を含めたこの現実世界は、上記に述べたようなトートロジーで満ち溢れています。それらは弁証法思考の誤用であり誤謬なのです。